悪役令息が戦闘狂オメガに転向したら王太子殿下に執着されました

Characters

ナリシュ
アニナガルテ王国の王太子。
次期国王として期待される
完璧なアルファ。
イゼアル
前世でオリュガの
部下だった侯爵令息。
優秀なアルファ。
ビィゼト
ニンレネイ
ノアトゥナ
オリュガの兄弟たち。
ネイニィ
BLゲームの
主人公である
男爵令息。
可愛らしいオメガ。
オリュガ
オメガの公爵令息。
前世を思い出し、
自分が悪役令息だと
気付いた。

プロローグ

緋色の水面が揺れて、紅茶の爽やかな甘い香りで意識が戻る。
「聞いているのかい？」
柔らかい声が耳に届き、僕は引き寄せられるように視線を上げた。
「……」
「オリュガ？」
名前を呼ばれて、少し驚く。
オリュガ・ノビゼル。確かにそうだが、何か違う。
ここは、王城の豪華な応接室。僕は長椅子の真ん中に座っていて、対面には王子様がいた。
プラチナブロンドの髪と群青色の瞳。童話の中から出てきたような王子様だ。
名前は……思い出せない。
ふたたび紅茶に視線を落とすと、陽の光が反射して、白く滑らかに光っていた。
「……聞いております。ナリシュ王太子殿下」
安堵する。よかった、記憶がなくなったのかと思った。

この人は、アニナガルテ王国の王太子、ナリシュ・カフィノルア王太子殿下。
僕より一つ年上で、王立ベチュア貴族学院の二年生。
十六歳から十八歳までの三年間、貴族の子息は学院に通う。王族も例外ではない。
……そうだ、僕は王太子殿下の婚約者の地位を狙っている。
オメガバースの世界で、僕はオメガに生まれ変わったんだ。ナリシュ王太子殿下はアルファ。
人口の二パーセントしかいないアルファは、優れた能力を持つ。頭脳、身体能力に優れている。
オメガ性は、アルファ性よりもさらに少なく、人口の一パーセント程度しかいない。出産に特化した性別だ。アルファの子供を産みやすく、三ヶ月に一度の発情期には身体が発熱し、性行為を求めて苦しむ。貴族や富豪に嫁ぐことが多いが、平民や田舎では娼館に売られたり、奴隷のように扱われることもある。
僕は公爵家に生まれたから、貴族子息として何不自由なく過ごしているけど。
発情期には強いフェロモンが出るため、誰にも会わず過ごさなければならない。今は多種多様な抑制剤があるため辛くはないが、昔のオメガは必死に身を隠さなければならなかった。今でも貧困層のオメガは副作用が強かったり効きが悪かったりする、粗悪な抑制剤を使っているという。
人口の大半、アルファでもオメガでもない人たちはベータと呼ばれる普通の性だ。
どうして今さらこんな常識をつらつらと考えているのかというと、応接室に僕を呼び出したナリシュ王太子殿下が「筆頭婚約者候補はネイニィ・リゼン男爵子息になる。そのつもりでいるように」と言った瞬間、突然、自分の中で「これは断罪モノだ」と騒ぐ声が聞こえたからだ。それを聞

いて僕は目を見開いて思考停止し、前世の記憶を思い出したのだ。
前世の自分がどうやって死んだのか、性別、名前、年齢は覚えていないが、知識だけが急に頭の中に蘇った。
これは異世界転生だ！　オメガバース設定のある中世ヨーロッパ風の世界か……よくある設定だな。
恋愛シミュレーションゲーム？　小説？　漫画？　どれ？
可能性は色々あるけれど、少なくとも僕は主人公ポジではない。
だって主人公ポジにいそうな少年は今、ナリシュ王太子殿下の隣に座って震えながら殿下の服の裾を掴んでいる。
首元でクルクルとカールしたストロベリーブロンドの髪と、ウルウルと潤んだ大きな新緑色の瞳は、いかにも愛されキャラといった感じだ。
彼の名前はネイニィ・リゼン。地方の男爵家の息子で、僕と同じ一年生だった。
ネイニィもオメガだ。キュルンと可愛らしい容姿が、入学式から大注目されていた。さらに、僕たちの学年の中では一番頭がいい。魔力量は僕の方が上だけど、彼は努力でカバーしているので、魔力対抗戦では勝てたためしがない。それに、ネイニィは希少な聖魔法使いでもある。
さて、僕がなぜわざわざ王城に呼び出されてこのような事態になっているのかといえば、僕はナリシュ王太子殿下の筆頭婚約者候補だったからだ。
筆頭婚約者候補とは、何人か婚約者候補として名を挙げている者たちの中でも、一番可能性の高

い婚約者候補一人のことをいう。
ナリシュ王太子殿下が婚約者を一人に定めていないのは、バース性のせいでもある。
なぜならバース性には相性というものがあり、小さいうちから婚約していても、もっと相性がいいアルファなりオメガなりを見つけると、婚約を解消してそっちと結ばれちゃうからだ。
つまり、アルファであるナリシュ王太子殿下は貴族家のオメガをいずれ婚約者に据えなければならないが、バース性の相性という問題があるため、学生のうちは複数婚約者候補をおいて相性を確かめる期間を設けているというわけだ。
王族のように複数婚約者候補をおくわけではないが、他の貴族も同じ理由で、子供の頃から許嫁（いいなずけ）を持つ人もいるが、いない人の方が多い。
代わりに出会いの場として、貴族には学院に入る義務があるのだ。歳の近い者が集まる学院で出会えるならその方がいいと、学院に入るまで婚約者を作らないのが一般的だ。
ナリシュ王太子殿下もその例に漏れず、王立ベチュア貴族学院で相性と学力やその他の能力、人間性などを鑑（かんが）みて婚約者を選ぼうとしている。もし学院で見つからなくても、学院卒業後は王太子として外交を行う予定なので、他国の王侯貴族との出会いもある。
だが現在、国内では魔力量、家柄、オメガという性別、どれをとっても僕以上の良縁はない。しかも僕の家はこの国唯一の公爵家だ。ナリシュ王太子殿下の卒業と共に、婚約者は僕でほぼ決定だろうという共通認識があった。
小さな頃からそう言われて育ったので、僕自身もナリシュ王太子殿下の婚約者となり、ゆくゆく

は王太子妃になるのだと思っていた。そしていずれはアニナガルテ王国の王妃に……なんて未来まで夢みていた。つい先ほどまでは！

だから筆頭婚約者候補がネイニィに変更されると聞いて、僕の心は一時停止したわけだ。

そのショックからか知らないけど、僕の頭の中に前世の記憶がワーッと流れてきて、今に至る。

「君の兄上には申し訳ないのだけどね。そのつもりでいてほしい」

つまりナリシュ王太子殿下はネイニィを筆頭婚約者候補に据えるつもりだから、お前は違うアルファを探せということだ。

ナリシュ王太子殿下の後ろには僕のすぐ上の兄上が立っている。

兄上の名前はニンレネイ・ノビゼル。僕の一つ上の兄にあたる。ニンレネイ兄上は次男で、僕は三男だ。僕の三つ上にもう一人、長男のビィゼト兄上がいる。

長男も次男もアルファの男性で、長男は既に父から公爵位を継承し、前公爵夫婦である両親は王都から離れた場所に住んでいた。次男のニンレネイ兄上はナリシュ王太子殿下の側近として学生のうちから殿下の側についている。もう一人四男のオメガの弟がいて、僕たちは四人兄弟だった。

ノビゼル公爵家はアルファ二人とオメガ二人の子供を持つ優秀な家系というわけだ。

ニンレネイ兄上をチラリと見上げると、僕と同じ緋色の瞳が僕を見返していた。

これは帰ったら御小言がある。

僕とニンレネイ兄上は仲が悪い。学院でやらかしていることもすぐにバレる。

なにしろ僕は頭が悪い。魔力は高いのに魔法はからきしだし、性格もキツかった。友達はいない。

この流れからいくと、いつもの僕なら癇癪を起こして、目の前に置かれた紅茶を殿下の隣に座るネイニィにぶちまけていたはずだ。

でもきっとその紅茶攻撃も難なく防がれてしまうのだろう。だってよくやるし。魔法が得意なネイニィならかかる紅茶を弾くなんてお手の物だろうし、なんなら殿下か兄上が防ぐんじゃないだろうか。

まあ、やらないけど。

今の僕は数分前の僕ではない。前世の記憶という異世界転生あるあるを思い出したので、そんなヘマはやらかさない。

しかし、僕の立ち位置ってなんだろう？

本気でゲームとかに転生してたらやだな……。だってどう考えたって僕の立ち位置は悪役令息にしか見えない。しかもＢＬオメガバースもの！

いや、同性との恋愛がダメとかではないよ？　そうではなく、悪役令息になって断罪されると不幸になるよね？　国外追放がマシってレベルで生きたまま人体実験されたり、娼館送りになったり？　最悪陵辱とか……

プルプルプルプル、それだけは勘弁。

なので僕はゆっくりと微笑んだ。そして頷く。

目の前のナリシュ王太子殿下が少し目を見開いていたのは、きっと僕が大人しいからだろう。

「わかりました。そのつもりでいますね」

僕は無害アピールのつもりでニコーと笑った。
殿下の後ろではニンレネイ兄上も驚いているし、殿下に縋り付いていたネイニィもポカンと口を開けている。さっきまで震えていたくせにどうしたんだろう？
いや、もうそんなことはどうでもいい。
僕は急いでやらなきゃならないことがある。だってよくて国外追放と言われる悪役令息ならば、その下準備を急がなければ。
今ナリシュ王太子殿下は二年生。これがなんというゲームなり漫画なり小説かは知らないが、断罪のタイミングは卒業パーティーが定番ではなかろうか。
だとすると、あと一年ちょいちょい猶予がある。
それまでに知識とお金を蓄えなければ！
「こうしてはいられません」
僕はそう言うと、すっくと立ち上がった。
「オリュガ？」
ニンレネイ兄上が不思議そうに僕の名を呼ぶが、気にしてはいられない。
「僕、やることがあるので失礼します」
さっさと立ち去ろうとする僕を、ナリシュ王太子殿下が呼び止めた。
「せっかく城に来たのだから、一緒にお茶でもと思ったのだけれども？」
え？　この状況の後に、お茶？　まぁ、ここのお菓子とお茶は美味しいけど……。何回か食べたことあるけど。殿下と食べたお菓子は忘れられない美味しさではあったけど……
「えっと、僕は急ぐので帰りますが、お菓子のお土産を兄上に預けてくださぁい」
僕は秘技ニッコリスマイルで手を振った。
ナリシュ王太子殿下は「え？」と今度こそ声を出して驚いていたが、どうせ婚約者にならず結婚もしないのなら、今後は疎遠になるだろうし構わないだろう。
僕はお菓子よろしくお願いします～と言って立ち去ったのだった。

僕は急いで王城から帰宅すると、早速兄上の執務室に向かった。もちろん今日ナリシュ王太子殿下に呼び出された内容を、長兄であるビィゼト兄上に報告するためだ。ニンレネイ兄上がすぐに追いかけてくるかと思って急いだのに、追いかけてはこなかった。好都合だ、今のうちに、と廊下を走って、ビィゼト兄上の執務室の扉の前に立つ。
コンコン、ココココンッ！
「オリュガ、何度も叩くんじゃない」
中から低い声が聞こえてきた。
なんで僕ってわかったの？
そぉっと扉を開いて中を窺うと、部屋の奥に設置された大きな執務机にビィゼト兄上が座って目も上げずに仕事をしていた。
「兄上……」

小さく呼びかけると、ビィゼト兄上は顔を上げた。
「どうした？」
兄上はすぐに立ち上がり、執務机を回って近付いてくる。ノビゼル公爵家の特徴は緋色の瞳を持っていることだ。だからビィゼト兄上の瞳の色も、僕やニンレネイ兄上と同じ緋色をしている。
「兄上、重大なお話があります」
「なんだ？」
あ、これ。絶対大したことないと思ってる顔だ。
「筆頭婚約者候補から外されました」
兄上の目が見開かれた。でも意外と反応は薄い。もっと怒られるかなと思っていたのに。
「それでオリュガはどうしたいんだ？」
ビィゼト兄上の問いかけに、僕はここで言うべきだと判断した。
「お小遣いをください」
お金！　まずはお金が大事だよね！　一人で放逐されても大丈夫なように資金調達しておかなきゃ！
「却下だ」
ガガーン。却下されちゃった。
「なんでですかぁ？」
「お前のお小遣いは既にマイナスだからだ」

なんてこと！
「ええ⁉　僕のお小遣いマイナスなんですか⁉」
そんな厳しい目で僕を見ないで！
「ただ今戻りました」
どうにかしてお小遣いを出してもらえるよう頼もうとした時、執務室の扉が開いてニンレネイ兄上が入ってきた。少し息を切らして僕とビィゼト兄上を交互に見る。扉を開けた執事は頭を下げて静かに退室し、執務室の中には僕たち三人だけが残される。
「ああ、ご苦労様。今オリュガから経緯を聞いた」
ビィゼト兄上は少し疲れた顔でニンレネイ兄上を労った。
「あ、ニンレネイ兄上お帰りなさい」
もう戻ってきちゃった、と内心残念に思いつつ、僕もニンレネイ兄上にお帰りなさいと声をかけた。せっかく声をかけたのに、ニンレネイ兄上は変な顔をする。
「あ、ああ……。今戻った。お小遣いがどうとか聞こえたが、どうしたんだ？」
一気に先ほどのやり取りを思い出した。
そうだよっ！　僕のお金！　どこに消えちゃったの⁉
僕は握り拳を作って、真剣な顔でニンレネイ兄上に訴えた。
「僕のお小遣いはないんだそうです」
ニンレネイ兄上……。さっきからなんで変な顔をずっとしてるの？

「このお菓子でも食べて落ち着け」
ニンレネイ兄上はなぜか眉をひそめつつ、手に持っていたお菓子を渡してきた。
「はっ！　お菓子～」
一瞬で僕の気分は最高潮になる。
「これ以上何にお金を使いたいんだ？」
お菓子の箱を開けていたら、ビィゼト兄上が尋ねてきた。
「え？　えーと、婚約者なしでも生きていけるようにしようかなって」
僕は箱からクリームの載った小さな焼き菓子を取り出して、パクつきながら答えた。
おっいしい～い。
パクパクと食べていると、ビィゼト兄上が驚いた顔で僕を見ていた。
なんでそんなに驚いているんだろう？
カサカサと箱から次のクッキーを取り出して、ジーッとクッキーを見つめる。自分の指にはクリームが付いている。クッキーがポロポロと崩れて胸に飾ったリボンを汚しているのが目に映った。
オメガは品よく美しく。
それがオメガの僕のモットーだった。今日だって、最初ナリシュ殿下の隣にネイニィが座っているのを見て、罵詈雑言を浴びせながらも、その佇まいはノビゼル公爵家のオメガであることを意識して品よく見えるよう気をつけていた。
暴れても美しく、オメガらしく。それが僕だ。いつもの僕なら紅茶一つ投げつけるのも、持ち手

を軽く摘んで品よく投げたに違いない。今みたいに手掴みで立ったままクッキーを食べるなんて絶対にしなかった。
僕は美しいオメガであろうと努力していた。綺麗に着飾り、美しいことが正解なんだと思っていた。いつも違う服を着て、宝石を身につけ、長く伸ばした薄茶色の髪を綺麗に結い上げ着飾った。
今日もいつも通り綺麗に着飾って王城に向かった。今も王城から帰ってきた時の格好そのままなので、その姿は美しく整えられていた。公爵邸の使用人が仕上げたので当たり前だが、ともすれば下品に見えかねないほど大量に使われた宝石も、まだ品よく見える。
「お前がどうやって番なしで生きていけると？」
僕の格好を上から下まで見ながら、ビィゼト兄上からため息交じりに言われてしまった。続けてニンレネイ兄上まで畳みかけてくる。
「毎月毎月大量の請求書がくるんだぞ？　服に宝石、飲食代。友達もいないくせにどうやったらそんなに使えるんだと思えてしまうくらいの高額請求書が毎月届くんだ」
僕は目を彷徨わせて手に持っていたクッキーを齧った。
そう、だったかなぁ……？
「この宝石を売ったらいいんでしょうか」
「待ちなさい」
「ばか、突然公爵家が宝石売り捌いたら変な噂が立つだろう？」
事業に失敗したとか、ノビゼル公爵家の三男オメガの宝石なのでとうとう何かやらかしたのだと

か噂が立ちかねない。
「ダメですか～」
心底残念。せめてもの救いはクッキーが美味しいことだけだ。
しょぼんと肩を落としたら、ビィゼト兄上が近寄ってきて、僕の口の周りを拭いてくれた。足元を見下ろすと、絨毯にクッキーの残骸がたくさん落ちているのが見えた。
「最有力候補ではなくなったが、婚約者候補から外れたわけではないんだぞ？」
ビィゼト兄上が慰めの言葉をかけてくれた。
「そうなのですか？　でも別にそれはいいんです」
うん、それはね、もういいんだよ。なんかどうでもよくなっちゃった。
「じゃあどういうことだ？」
ニンレネイ兄上が驚愕の顔で尋ねてくる。
「えぇっと、僕もそろそろ将来を考えて独り立ちできるようにならなきゃかなぁって。そうしたらやっぱりお金は大事だし、貯めておこうかなぁって」
ほら、国外追放とかされるかもだし？
「殿下はダメでも、また違うアルファに出会うかもだろう？　そのためにも勉学に励み、魔力操作を覚えて自分が優れたオメガであることを周知させた方がいい。そうすればアルファの方からお前に好意を抱くはずだ」
ビィゼト兄上の言葉には説得力を感じた。それはとても当たり前のことだったのかもしれないけど、目から鱗が落ちた気分だった。
「勉強……」
「そうだ」
「わかりました。僕、勉強します」
ビィゼト兄上の言葉を信じてみるよ！
お小遣いについては、今後出費を抑えればマイナス部分が補填されていくだろうから、無駄使いをなくせばいいと教えてもらった。僕はコクリと頷く。
道が開けてきた気がする！
「僕、頑張ります！」
兄上たちにニコーッと笑いかけると、二人とも驚いた顔で小さく頷き、頑張りなさいと言ってくれた。

◆◆◆

そんなこんなで、あっという間に二年生だよ。
僕が前世を思い出してから数ヶ月経ちました！
僕は無事進級して二年生になれたよ。僕の一年生時の成績じゃ進級は危ぶまれたけど、ニンレネイ兄上のカテキョのおかげでなんとかなりましたぁ。

僕がジーンと感動していると、キャッキャと楽しげな笑い声が響いてくる。二年生棟の二階から階下の庭園を見下ろすと、そこには見知った集団が歩いていた。
お～、ネイニィとその取り巻きたちが楽しげに歩いているね。
ここ、やっぱBのLがつくオメガバース仕様恋愛ゲームの世界じゃなかろうか。
主人公はネイニィだ。男爵子息だしね。攻略対象者はナリシュ王太子殿下以下騎士団長子息と宰相子息、お色気担当の保健医と、公爵家子息のニンレネイ兄上。年下枠は……いない？　あとはどんなのがくるのかなぁ。他国の王族とか隠しキャラでよくあるよね。
てか保健医がなんで学生と戯(たわむ)れてるんだよ。明らかに年齢層違うでしょうに。
僕が悪役令息枠かと思ってあの集団に寄りつかないようにしてたら、なんと僕の一つ下の弟が頑張ってくれている。
僕の弟の名前はノアトゥナ・ノビゼル。王立ベチュア貴族学院に入学したばかりの一年生だ。僕の髪は薄い茶色なんだけど、ノアトゥナは茶髪というより薄い金髪っぽい髪をしている。
瞳の色は僕ら四兄弟でみんな同じ、公爵家特有の緋色だ。
僕は窓をカタンと少し開けて、外の様子を見ることにした。
「ナリシュ殿下っ！　僕も一緒にお昼ご飯食べてもいいですか？」
ノアトゥナが果敢にもナリシュ王太子殿下の制服に縋りついている。ノアトゥナも僕と同じオメガだ。小柄な身体と愛らしい顔立ちは、僕よりも可愛いんじゃないだろうか。入学早々他のアルファから声がかかっていたけど、今のノアトゥナはナリシュ王太子殿下に夢中だ。

「ノアトゥナ、殿下に失礼だよ」
「ニンレネイ兄上は黙っていて！」
頬を膨らませてプンと兄に言い返す姿も愛らしい。
「カフェテラスで食べるから、君も来るといい」
柔らかく殿下は許可してくださるが、本来なら不敬だ。側近のニンレネイ兄上の弟であり、国で唯一の公爵家の子息だから寛大に許可してくださるのだろう。
そうか、今日はみんなでカフェテラスに行くのか。
残念……。あ、残念というのはナリシュ王太子殿下に対するものではない。ニンレネイ兄上に対してだ。
今日は学年一斉小テストの日だった。抜き打ちでそのうちあるよとニンレネイ兄上からの情報で、密かに僕は勉強した。
そして昼食前には返された答案と順位発表の結果をニンレネイ兄上に報告するつもりだった。
しょうがない。帰ってからにしよう。
そう思って開けた窓を閉めようと手を伸ばすと、ニンレネイ兄上がなぜか上を見上げた。
はたと兄上と目が合う。僕が首を傾げると、少し口角を上げてちょいちょいと手招きしてきた。
ゲゲッ、まさかあのメンバーでの昼食会に僕も参加しろと？
僕はヤダヤダと首を横に振る。
その無言のやり取りをナリシュ王太子殿下に見つかってしまった。

再度内心ゲゲッと思いながらも、見つかっておいて隠れるわけにはいかない。それこそ不敬だ。
僕が二階にいるから、殿下が見上げることになってしまうけど仕方がないよね。失礼にならないよう頭を下げる。
ナリシュ王太子殿下はニンレネイ兄上に何か話していた。そのままみんなを連れてカフェテラスの方へ去っていったが、ニンレネイ兄上はその場に残っていた。
「オリュガも来るように言われたぞ」
「ええっ、めんどくさい！」
僕は大きな声で拒否する。
やだよー。だって小テストはネイニィも受けているのだ。張り出された順位の一番は、もちろんネイニィだった。
僕は三十二番だよ。これでもすっごく頑張った方。だって僕が前世の記憶を取り戻した時、僕の成績は最下層だった。ニンレネイ兄上が家庭教師を申し出てくれて、幼児教育から一般常識に進み、ようやく最近年相応の学習についていけるようになったのだ。前世の知識はあっても、この世界の学問は全く違うため、勉強はとても大変だった。
王都にあるこの学院の一学年にはだいたい三百人程度が在籍しているから、三百から三十二まで順位を上げたのは、なかなか頑張った方だと思う。
王立ベチュア貴族学院には貴族だけでなく、平民でもアルファやベータの優秀な人が入ってくるので、平均的に頭がいい人たちが多く在籍している。平民出身のオメガは残念ながら少数だ。学院

に入りたくとも家が出してあげない子、もしくは貧しくて……、という子は来られない。平民には学費免除という特別枠もあるけど、アルファやベータの子には活用されても、オメガの子にまでなかなかその枠は回らなかった。
嫌がる僕をニンレネイ兄上は二年生棟まで迎えにきて、僕は結局引きずられるようにカフェテラスに連れていかれてしまった。
「やあ、オリュガ。久しぶりだね」
「お久しぶりです、ナリシュ王太子殿下」
僕の挨拶を受けて、殿下は穏やかに微笑む。
前世を思い出す前はこの微笑みが好きだったけど、今はこの笑顔苦手なんだよねぇ。目が笑ってないような気がしてならない。
「オリュガ兄上も来たのですか？」
「そうだよ。あ、その席はどうぞ」
ノアトゥナとネイニィはナリシュ王太子殿下を挟んで左右に座っていた。
僕はニンレネイ兄上に用があるので、兄上の手を取って隣のテーブルに移動する。
学年一位のネイニィの前で三十二番だと恥を晒したくない。それを理解しているニンレネイ兄上は、大人しく僕に手を引かれてついてきてくれた。
最近僕はニンレネイ兄上と仲が良いのだ。
「兄上聞いてくださいっ！　僕三十二番でしたよ」

席に着くなり、僕はコソコソと報告する。
「そうか。よくやった。頑張ったな」
ニンレネイ兄上はよしよしと頭を撫でて褒めてくれる。最近の兄上は僕の扱いを心得ている。僕は褒められたら伸びる子なんだ！
「そうか、オリュガは三十二番だったんだね」
耳元で声がして、僕はビクッと肩を揺らして驚いた。この柔らかな低音ボイスはナリシュ王太子殿下のものだ。
「オリュガ様は最近頑張っていらっしゃるんですよね」
ナリシュ王太子殿下にくっついて、ネイニィまで来てしまった。ああ、聞かれたくなかったのに。学年一位様は余裕の笑顔で僕の学力を見下してくれた。
なんか最近、ネイニィのあたりがキツイ。
それもナリシュ王太子殿下がやたらと僕に話しかけてくるせいだ。
僕は避けているのに、なんでか見つかる。
「そう言わないでやってくれ。この数ヶ月で目覚ましい努力なんだ」
ニンレネイ兄上のフォローは優しい。
これはあれだ。悪役令息だけど転生したら前世を思い出して、嫌われからの愛されに転換されるという現象なのだ。
僕は一人でウンウンと頷き、納得した。

「またオリュガ兄上が変なこと考えてるよ」
ノアトゥナも寄ってきて何か言っている。最近はノアトゥナともよく話すようになった。共通の敵がいるから、どうやら僕に親近感が湧くらしい。敵とはネイニィのことだ。
ノアトゥナは前世を思い出す前の僕と割と同類だ。ナリシュ王太子殿下が好きで、用もないのについて回る。勉強は嫌いで、魔力はあるのに練習は嫌い。なので下手くそだ。
それでも顔はすこぶる可愛い。
「オリュガ様は魔法もかなり上達されたんですよね」
ネイニィはまだまだ僕を貶(おとし)めたいようだ。
主人公のくせに性格悪いよね。相手を褒めていると見せかけての見下しが常だ。
「いえいえ、それほどでもぉ～」
僕はニコニコニコ～と笑った。秘技・笑顔で流そう作戦だ。
王太子殿下が僕の横にさりげなく座ったため、ゾロゾロとみんな移動してきてしまった。二人掛けテーブルに行くべきだった。自分の詰めの甘さを呪いたい。
ノアトゥナはニンレネイ兄上が僕の隣の席を譲って座らせ、ナリシュ王太子殿下の反対隣には当たり前のようにネイニィが座った。
「そういえば来週、下級生を交えた合同練習があるね」
殿下が話題に挙げた合同練習とは、入ったばかりの一年生に今後の方針を決めさせる指針となるように、上級生が剣と魔法で模擬試合をするものだ。

一対一で勝った人間が上に上がっていくトーナメント式。勝てばご褒美付きだ。毎年行われるこの合同練習でのご褒美は何かしらの魔導具なので、頑張る生徒も多い。
僕は去年一年生だったから、ナリシュ王太子殿下やニンレネイ兄上の試合を見ているだけだった。今年は試合をする側だ。
去年は当然のようにナリシュ王太子殿下が優勝していた。騎士団長の息子に王太子が余裕で勝つとか、未来の騎士団は大丈夫なんだろうか。ここはＢＬ恋愛ゲームかもしれない世界だから、それでいいのかなぁ？
秋には一年生を交えての模擬戦もあるので、一年生も自分が学びたい内容を決めるために、この合同練習に対する興味は強い。
合同練習と模擬戦かぁ～、と僕は空を見上げる。
一年生の秋に行われた模擬戦では、僕は戦いたくなくてずっと後方にいた。ビィゼト兄上に戦いたくないとわがままを言って、兄上がお金をちらつかせて一緒に班を作ってくれる人間を集めてくれたのを思い出す。
貴族でも三番目以下はお金をかけてもらえない家も結構あるので、そんなところの子供や、平民で現金が欲しい人を集めて僕と組ませたのだ。おかげで模擬戦会場の安全な端っこでお茶を飲んで過ごして終わらせることができた。
ま、そのせいで留年の危機に陥ったわけだけどね。
「合同練習は楽しみです」

ネイニィが殿下ににっこりと微笑む。三年生の殿下も合同練習に参加する。昨年に引き続き、また勝ち上がるのだろうか。ナリシュ王太子殿下は文武両道だ。剣も魔法も幼い頃から鍛え、学生の中で勝てる者はいない。
「ネイニィの実力も見られるね。頑張ってくれ」
オメガはオメガとしか試合をしないので、二年生オメガの優勝はネイニィだろうと誰もが思っている。
ネイニィは殿下に応援されて、可愛らしくはにかんでいた。チラっと僕を見るのも忘れない。
「オリュガも出るのかな？　期待しているよ」
何を期待するんだろう？
「はぁ……、努力します～」
よくわからんが、笑顔で答えておこう。でも、来週はちょっと時期がよくないんだよねぇ。
僕はナリシュ王太子殿下の顔も見ずに空を見上げて、ボンヤリと来週のことを考えた。

そして、僕の嫌な予感は的中した。
発情期だよ。ヒートだよっ！
朝からちょっと熱っぽいなぁと思っていたんだけど、馬車から降りて教室に入ったら、ムズムズムズ～ときちゃったね。
オメガは発情期に入るとフェロモンというアルファを誘惑する匂いを出す。なので本当は屋敷に

引き篭もるのが一番なのだろうけど、僕は抑制剤を飲んで学院に来た。
前世の記憶が戻ってから今回が三回目。前回と前々回はちょうど家にいたからそのまま引き篭もりになったけど、今回は予感はあっても無理して出てきてしまった。
身体を動かせると思うと不思議と気分が上がり、どうしても合同練習に出たかったからだ。
「本当に出るのか？　オメガは発情期の場合は欠席扱いにならないんだぞ？」
「知ってます」
もちろん知っている。前の自分なら喜んで休んでいただろう。
「せめて保健室に……」
いや、保健医そこのテントに待機してるし。ネイニィの側にいる気満々だよ。
「大丈夫です。抑制剤飲んできたし、身体を動かしていたら気が紛れると思うし」
ニンレネイ兄上がそんなバカな、と呆れている。
兄上の心配はありがたいけど、僕は戦いたい。なぜだか戦うことを僕は知っている気がした。
前世の経験だろうか。まだ全部は思い出せていない。時々こことは全く違う景色を見るけれど、それがどういったものなのか未だに理解できずにいた。
戦いたいという気持ちも本当だけど、本音は戦うことで何かを思い出せそうな気がしている。
残念なのは僕がオメガで、オメガはオメガ同士でしか戦えないということだ。オメガの数は少ないし、基本体力のない華奢なオメガは、この合同練習に参加しない。参加するのは魔法が得意なやつばかりだ。そう、ネイニィのような。

トクトクと心臓が鳴り、身体は今から行う戦闘に高揚しながらも、心はスウッと冷えていく。
「ああ……、久しぶりだ」
知らずのうちに笑顔を浮かべて言葉にしてしまう。何も覚えていないけれど、静かな興奮が抑えられず、手に持つ剣をゆっくりと撫でた。

キィンという甲高い音と共に、相手の剣はクルクルと回って後方の地面にプスリと刺さった。
「しょ、勝者オリュガ・ノビゼル！」
名を告げられ、試合が終了したので、僕は剣を腰の鞘にしまい片手を上げた。僕の試合を見ていた観衆はシンと静まり返っている。
はあ……、まったく。期待していただけに失望は大きい。
全く手応えがない。やはりオメガは非力でダメだ。手加減しなくては殺してしまう。
無意識に浮かんだその思考に、ハッとした。
僕は今何を考えていた？　殺す……、殺す、か。以前の僕は戦争でもしていたのだろうか。
秒で終わった試合に興味関心も薄れ、次の試合を待つべく待機所の椅子に座った。
剣を弾いたら飛んでいっただけなのに、先ほどの対戦相手は怪我をしたと言って救護室に向かっていた。オリュガ・ノビゼルが何か狡い手を使ったに違いないと囁く者もいる。
自分の過去の記憶から、そう言われても仕方がないなと思った。以前の僕は自分の美しさを知っていて、アルファやベータを侍らせていた。記憶が戻った最初の頃は、そんな取り巻きたちが鬱陶

しかったのだが、ビィゼト兄上に泣きついたらあっさり解決してしまった。どうやったのか、ピタリと言い寄る人間がいなくなった。
同時に婚約の申し込みは殺到しているらしいけど、ビィゼト兄上がじっくりと吟味するからと言って、未だに一つも僕のもとに届いたことはない。
僕はふむ、と頷いた。
悪役令息には強力な仲間がいたりする。きっと長兄がそうなのだろう。そして最後は一緒に断罪されて没落するのだ。
没落回避のために悪役令息が奮闘する話などもあるが、さてここはどっちなのだろうか？
楽勝で試合に勝ち進みながらボンヤリとどうでもいいことを考えていると、あっという間に最終決戦になってしまった。早すぎる。
案の定、ネイニィが勝ち残っていた。
「すごいね！　特訓したのかな？」
「あー……まあね、脳内で」
ネイニィには、「あはっ、脳内で？　おかしい～」とうけてしまった。十中八九嘲笑だろうけど。
記憶が戻って身体の使い方を思い出しただけなんだけどね。だからそれに合わせて、今オメガである自分の身体を考慮して鍛えているのだが、決してこの身体では無理ができない。あとは魔法の訓練のみだ。これがなかなか面白い。
ネイニィは魔法が得意なので面白い戦闘ができそうだと思い、ふわりと笑ってしまった。

楽しくて笑っただけなのに、なぜかネイニィはカッとなって顔を赤らめている。
「オリュガのくせに」
誰にも聞こえないようボソリと小さく呟かれた言葉は、しっかりと僕にだけは届いた。
目の前のネイニィの顔が歪むのを静かに観察する。
僕たちの最終決戦が始まろうとしていた。

またもやキィンという高い音と共に、細身の剣が放物線を描いて空を飛ぶ。
視界の端で唖然とそれを眺めている周囲の様子が見えていた。
オメガの中ではネイニィ・リゼン男爵子息は断トツで優勝候補だった。だからこそナリシュ王太子の筆頭婚約者候補に上がったのだ。
それがアッサリと負けてしまい、みんな信じられないようだ。
今までの対戦者はか弱きオメガばかりだった。だが流石にネイニィだけは違うだろうと思っていたのに……。そう言いたげな顔が並んでいた。
目をぱちくりとさせるネイニィに尋ねる。
「あれ？　いつ魔法使ったの？」
僕は開始と同時にネイニィの懐に飛び込み、ネイニィの剣を弾き飛ばした。そして剣は見事にグサリと地面に刺さった。目の前のネイニィは口をワナワナと震わせている。
ネイニィとは魔法合戦になると思っていたのに、いつ魔法は発動したんだろう？

「ふ、ははは」
沈黙を切り裂くように、笑い声が響いた。
ネイニィがなぜか驚きの表情で声のした方を見ている。
笑ったのは誰だと思って、僕もそちらを見たら、そこにいたのはこの国の王弟殿下だった。
ナリシュ王太子殿下とそっくりなプラチナブロンドと群青色の瞳の美丈夫が楽しそうに僕たちを見て笑っている。彼の名はノルギィ・カフィノルア。アニナガルテ王の異母弟にあたり、ナリシュ王太子殿下の叔父だったはず。アルファで、魔法師団を率いる団長でもあった。
なんだろう、この人。首を傾げて見ていたら、なぜか僕の方に近付いてくる。
「君は強いね」
ノルギィ王弟殿下は、実に楽しそうな笑顔で僕に話しかけてきた。
アルファは軒並み背が高い。僕は男性オメガの平均身長はあるけど、体躯に恵まれるアルファには見下ろされてしまう。
「ありがとうございます」
とりあえず褒められたのかなと思い、お礼を伝えてみた。
「オメガ以外と対戦したことはあるのかな？」
気さくな物言いに、どうやら気を遣う必要はなさそうだと判断して、普通に返事を返した。
「ないです」
ノルギィ王弟殿下はふぅんと顎に手をやって僕を見てくる。ナリシュ王太子殿下と同じ群青色の

瞳は、楽しそうに輝いていた。
「じゃあ俺と少しやってみるか？」
願ってもない申し出に驚いた。先ほどのネイニィとの超つまらない戦闘にガッカリしていたところだったので、急に降って湧いた好機に一気に興奮する。
アルファと戦える？　しかも魔法師団の団長と！
僕が目をキラキラさせてコクリと頷くと、ノルギィ王弟殿下は口角を上げてさらに目を煌めかせた。
だったら邪魔なものは取り外しちゃおう。僕は怪我防止用の胸当てと肘膝当てをつけていたが、外していいかと許可を取った。
「怪我してしまうと思うが？」
「つけてると動きにくいので」
王弟殿下は魔法師団長だ。魔法が得意だからこそ、その職に就いているに違いない。鎧ではなく自分で自分に保護の結界を張れるから、王弟殿下は鎧をつける必要はないのだろう。
でも、僕だってこの防具は邪魔だ。大会に参加するならばつけろと言われたからつけたのであって、もう二年生オメガのトーナメントは優勝したのだから必要ないはず。これはトーナメントとは関係のない決闘だ。最高の戦いをするならば防具はいらないよね！
「ナリシュが代わりに結界を張ってあげてくれ」
ウキウキとしながら防具を外していたら、王弟殿下が気を利かせてナリシュ王太子殿下に頼んで

くれた。
う、うーん……、ナリシュ王太子殿下にかぁ。
ナリシュ王太子殿下も静かに成り行きを見守っていたけど、王弟殿下から声がかかり、頷いて僕に結界を張ってくれた。
おおっ、すごい！　身体にピタッと密着するような完璧な防御結界に感心する。
「ふわぁっ！　ありがとうございます」
にこーと笑ってお礼を伝えると、ナリシュ王太子殿下は少しだけ微笑んで頷き返してくれた。
「うむ、では始めようか」
王弟殿下が開始の合図の代わりに声をかけてきたので、僕はペコリと頭を下げた。
「よろしくお願いします」
そして飛んだ。
音もなく肉薄した僕を、王弟殿下は難なく剣で受け止める。王弟殿下は魔法師団長ではあっても剣も使う。空いた席が騎士団長ではなく魔法師団長の方だったからその席に就いただけの人だったはずだ。
「早いね」
そう言いながらも、ノルギィ王弟殿下は顔色一つ変えずに僕の剣をいなしてしまう。
「ふむ、この速さならば並の魔法使いでは発動が間に合わないだろうな。ここが戦場ならばあっという間に切り伏せられて終わりだろう」

賞賛の言葉の代わりに、僕はより一層早く剣を振るうことで返事を返す。
キィン、ギィィンと、剣戟（けんげき）だけが静かな闘技場に響いた。あちこちで行われていた試合は一時中断し、僕たちの対戦を見学しにみんな集まってしまっていた。
ヤジも応援も一切入り込めない勝負に、誰もが静まり返り息を潜めている。
ノルギィ王弟殿下の剣は力強く重い。対して僕の剣は軽く早い。ここにいる奴らはみんな、僕は勝てないと思っているだろう。物理的な力の差がありすぎるからだ。体格だって僕と王弟殿下とでは倍ほども差があるように感じる。
「これがアルファ？　強いなぁ」
思わずむむ～と唸る。だけど楽しい。
「言っておくがアルファだからと言って俺に勝てる奴はそうそういない」
「あ、そっか。魔法師団長だもんね」
僕の言いぐさに腹を立てることもなく、ノルギィ王弟殿下は余裕で笑った。
ガガガガッと僕の剣が高速で切り込むのを王弟殿下が軽く受け止めながら、僕たちの会話は穏やかに続く。
「卒業したら俺の団に入るか？」
「入ったらどうなるの？」
「戦場に行く」
「……へぇ」

心がザワリと湧き立った。ああ、わかる。僕は今、心の底から笑っている。
「ねえ、じゃあこんなことをやってもいい？」
覚えたての魔法を使ってみよう。きっと王弟殿下なら大丈夫だよね？
楽しくて嬉しくて、こんな強者に出会えたことに喜びを感じた。
ノルギィ王弟殿下が防御魔法を重ね掛けしていくのがわかる。王弟殿下は戦い慣れている。おそらく直感で防ごうとしているのだろう。
剣の動きも軌道も変えずに、ただ純粋に重たくなった僕の攻撃は振り下ろされた。
「⁉」
ガギィィィン！　と先ほどとは全く違う重たい金属音が闘技場に響く。
「あっ、受け止められちゃったぁ」
今使える最大攻撃だったのに、王弟殿下は受け止めてしまった。あまりの嬉しさにニコリと笑みが浮かぶ。楽しくて楽しくて仕方がない。アルファってこんなに丈夫なんだぁ？
「ぐっ‼」
ギンッ、ガツンッという激しい音と、剣の刃先が削り取られていく様に、観客はみんな一様に青褪めているようだが、それがなんだというのだろう？
先ほどまで余裕で笑っていた王弟殿下も目を細め、その表情に険しさが増す。それでも口元は笑っているのだから、この人も僕と同類かもしれないね？
双方の剣にヒビが入り、嬉々として斬り込みに入った時、間に割り込む存在がいた。右と左に剣を持ち、僕と王弟殿下の剣は片手ずつで受け止められてしまう。
バギィィンー……‼
劈くような破壊音を立てて、僕の剣は折れてしまった。それは王弟殿下も同じだった。
「‼」
「……くっ！」
全体重を使って飛び込むように斬り込んでいた僕は、弾かれ宙に浮き一回転して着地した。
王弟殿下は急に止められたことにより顔を顰め、小さく唸る。
両手に剣を持ったナリシュ王太子殿下の群青色の瞳が、僕を見つめていた。
「そこまで。訓練用の剣ではもう持たないよ」
「ああ、すまない。つい熱くなってしまった」
王弟殿下の返事にナリシュ王太子殿下は静かに微笑み返すと、片方の剣を鞘に戻し、もう片方を地面に刺した。
しばらくするとザワザワと生徒たちが騒ぎ出す。今のは何だったのだ。単なるパフォーマンスなのか、本気だとしたらオリュガ・ノビゼルは実は強いのだろうか、と騒ついているようだ。
僕としては僕の攻撃を片手で簡単に弾き飛ばしたナリシュ王太子殿下の方がびっくりだけどね。
ああ～これで終了かぁ、と折れた剣をしげしげと眺めていると、ナリシュ王太子殿下から名前を呼ばれた。
「オリュガ」

僕はなんだろうと小さく小首を傾げて、ナリシュ王太子殿下のもとへトコトコと近寄った。
「今のは何を発生させたのかな？」
「うん？　重力だよ？」
ナリシュ王太子殿下は「重力……？」と呟くと、自分の剣を鞘ごと外して重力をかさ増しさせていった。殿下の鞘を握る手の甲には血管が浮き出て、鞘がミシミシと音を立てているのに、ナリシュ王太子殿下の表情は何の苦もなさそうに涼しい顔で魔法を行使している。
「こういうことかな？」
「うん。でもそれだけじゃ剣がすぐに折れちゃうから、剣も保護しないと」
「そう。オリュガが使った剣はオメガ用の華奢な剣だったからね。よくもったね」
オメガ用とアルファ用では耐久力が違う。それに、僕が今日使った剣は借り物だから、すぐに折れるだろうと思って魔法で保護していた。
対してノルギィ王弟殿下の剣は同じように会場で使われる剣を借りていたのだが、魔法の保護なく素で受け止めていた。ただ、アルファ用の重たい剣ではあったから、一緒に折れたのだ。
ナリシュ王太子殿下に訊かれたから簡単に答えたけど、実行に移すのは難しい。
剣を保護しながら重力を増し、自分の身体も強化しなければならない。僕の身体はナリシュ王太子殿下が保護してくれてはいたが、身体強化は僕自身がしていた。同時進行で魔法を発動し、微調整をしながら攻撃を行う必要があった。いくつもの計算式と呪文が必要な魔法だ。しかも全てを無詠唱で行いながら、王弟殿下相手に剣で交戦する必要があった。

ナリシュ王太子殿下は僕が何をやっていたのかを観戦しながら理解したっぽい。
「もっと丈夫な剣がいいかな？」
まるでこっちの指輪とこっちのブローチどっちが可愛い？　といった軽い調子で尋ねてくる。そんなこと爽やかに訊かれても困っちゃうよ。
「……今度、魔法の負荷に強い剣をあげよう」
えっ!?　それって、魔法剣と呼ばれる、なかなか手に入らない代物のことじゃない？
期待に胸を躍らせながらも、本当だろうかと王太子殿下を見上げる。
「え!?　ほんと!?」
群青色の瞳と見つめ合い、その瞳が細まって、わずかに笑みに変わるのを見た。
その笑顔は本当だと言っていた。やったぁ、と思わず喜んでしまう。
その瞬間、糸が切れたように自分の身体が傾ぐのを感じた。
「はれ……？」
倒れかけた身体をナリシュ王太子殿下が咄嗟に支えてくれたようだ。地面に直撃は免れたけど、視界がチカチカと霞み、暗く沈んでいく。
「……はぁ。本気かな？」
何が？　と尋ね返したかったのに、身体から力がどんどん抜けていった。王太子殿下の声がどこか遠くから聞こえてくるようだった。
「ニンレネイッ！」

わぁ、珍しく急いだ声だ。いつもはゆったりと余裕のある話し方をするのに、今は焦りを含んでいる。
いつの間にか、僕はナリシュ王太子殿下に抱っこされていた。さっきまで戦っていたノルギィ王弟殿下がどうしたのかと尋ねているのが聞こえる。
両殿下と兄上が発情期がどうのと話している声が聞こえて、そういえば自分は朝から発情期で熱っぽかったのだと思い出した。戦える高揚感ですっかり忘れていた。
発情期による欲情は、戦場で生きるか死ぬかの高揚感と似ているのだなと思いながら、眠りに落ちていくのを感じた。

◆◆◆

合成ガラスの中に満たされた養液の中で、プラチナブロンドのポヤポヤとした髪が揺れている。
最近自分の親指を吸い出した。その親指も口も小さくて、何度見ても飽きなかった。
早く出ておいでと話しかけ、真っ青な目が少しだけ開いた時、見えているのだろうかと心が浮き足だった。
可愛い、可愛い、僕の子供。
何もない僕に初めて許可された僕だけのモノ。
ここから出てきたら泣くだろうか。

歩くだろうか。
話すのはいつだろうか？
いや、それよりも名前を決めないと……
身体が火照（ほて）り、喉が渇く。
水……、と呻くと誰かが身体を起こしてくれて、コップの冷たい縁が唇につく感触がした。
喉に流れてくる水をコクコクと飲むと、少しだけ頭が冴えてくる。
僕の顔を覗き込んでいたのはプラチナブロンドの髪に、群青色の瞳の美しい青年だった。
誰だったっけ？　とぼんやり考える。ああ、頭が回らない。
「大丈夫かい？」
その人はうっすらと笑いながら尋ねてきた。どこか義務的な優しさだなと感じる。そこに具合悪そうな人間がいるから、道徳的に尋ねたのだろうという気がした。
そんな生き方をしないでほしい。
もっと自分を出してはダメなんだろうか。
この人が自分を心配していないのは理解していたけど、僕は震える手を頑張って持ち上げた。
「……よしよし」
さっき見た赤ん坊の頭を撫でたかった。優しく撫でて、一緒におやすみと寝たかった。
叶わなかった願いが思い出されて、悲しくなって目の前の青年の頭を代わりに撫でた。

そしてほんのり笑って目を瞑る。
かすかに爽やかな甘い香りがして、あの子もこんな匂いだったのかなと回想する。いや、合成ガラスの中のあの子の匂いは最後の最後まで嗅ぐことができなかったんだった。
よしよし、よしよし、と数度撫でたプラチナブロンドの髪は、柔らかく指に触れて気持ちがよかった。
青年の髪を撫でたことで、願いが少しだけ叶ったのだと思えて、満足してしまった。
スウ……、と寝息を立てて再び眠りに落ちる。
だから頭を撫でられた青年が、目を瞠(みは)っていたことを僕は知らない。

◆◆◆

カチャ……という音と共にニンレネイ・ノビゼルが入ってきた。
まさかオリュガが発情期中なのに抑制剤を飲んで試合に出ていたとは誰も知らず、私は兄であるニンレネイに注意をした。オリュガは急いで保健室に連れていってベッドに寝かせ、ニンレネイは帰りの馬車の手配とオリュガの学習道具を回収しに行っていた。
「申し訳ありません、ナリシュ王太子殿下。後は俺が見ます」
ニンレネイは帰宅の準備のために離れなければならなかったので、私が代わりにオリュガの様子を見ていたのだが、急いで済ませてきたのだろう。やや肩で息をしていた。

オリュガには再度抑制剤を飲ませ、私もアルファ用の抑制剤を服用した。これでお互い発情は回避できている。倒れた時に嗅いだ強い紅茶の匂いは薄れていた。いつもだったらオメガの匂いはなるべく嗅がないよう離れているのに、自分から見ていると申し出てしまった。
昨今の抑制剤の改良は目まぐるしく、薬の効きはいい。とはいえオメガは発情期中にアルファに項(うなじ)を噛まれてしまうと番が成立してしまうというリスクがあるため、普通は人前に出てこない。まだ番もいない、多くの若いアルファが通う学院なんてもってのほかだ。
番になれば、オメガは噛んだアルファとの性行しか受け付けない。発情期中に出すオメガのフェロモンは噛んだアルファにしか効かなくなるが、それは愛し合った者同士ならば喜べることなのであって、事故で番ってしまったなら単なる不幸だ。
アルファは複数番えるが、オメガは一生に一度しか番えない。だからオメガは自衛するものなのだ。
「構わないよ。これからは来たがっても必ず休ませなさい」
「はい……」
少し前までのニンレネイなら、オリュガのわがままは絶対に許さなかった。学院でも常に目を光らせ、何か悪さをしていないか見張っていたはずなのに、ここ最近は長兄のビィゼト・ノビゼル公爵同様オリュガにかなり甘くなっていた。
後はニンレネイに任せていいだろうと判断し、私は保健室から外に出ることにした。
抑制剤が効いているとはいえ、まだ微かにオリュガからは紅茶の匂いがしていた。

オリュガのフェロモンは芳しい紅茶の匂いだ。紅茶が好きで様々な産地のものを集めて愛飲している身としては、オリュガの匂いは好ましく感じた。
オメガの匂いはアルファを誘う甘い匂いが多い。その中でオリュガの紅茶の匂いは珍しい方だった。
今までオリュガのフェロモンの匂いなんて気にしたこともなかった。むしろ嫌ってすらいたのに、最近彼の紅茶の匂いが気になっていた。
先ほどのオリュガを思い出す。
緋色の瞳はまるで紅茶の水面のようにゆらゆらと揺れて滑らかに光を反射し、私の瞳をジッと見つめていた。
笑いながらゆっくりと細い指が私の頭を撫でた時、普段ならさりげなく相手に不快感を与えないように避けるのに、大人しく撫でられてしまった。
驚きすぎてその手を払うことも忘れて、オリュガの緋色の瞳を凝視していると、オリュガは満足したように眠ってしまった。
なぜ撫でたのか、覚えているだろうか。
無意識か？
オメガは発情期中の記憶が飛びやすいと聞いたことがある。次に会った時に尋ねて、答えが返ってくるだろうか。
そこまで考えて、何を馬鹿なと頭を振った。

オメガは自分を守ってくれるアルファを探す生き物だ。無意識に無邪気で、無自覚に打算的なのだ。
だから私自身も己に一番得になるオメガを番にするつもりでいた。オメガはあまり好きではない。だから番は一生に一人だけでいいと思っている。そしてアルファを産んでくれれば、後は用済みだ。
贅沢を与えればいいだろうと思っていた。そして発情期の相手をして満足させてやればいい。そういう相手を選べばいい。
オリュガは公爵家の人間で、オメガとして美しく物欲が強かった。頭の悪さは特に問題視していなかったのだが、性格が悪く、周囲に嫌われているのは王太子妃とするにはやはり問題が大きかった。
陛下からネイニィ・リゼン男爵子息を新しい候補として考えておくように言われてそう対処したが、最近のオリュガを見ると、陛下の判断は時期尚早だと感じた。
だから、ネイニィを筆頭婚約者候補にしてはいるが、手を出したことはない。
ネイニィはいつでもいいとばかりにそれとなく誘ってくるが、最終的に決めるまでは一切手をつけるつもりはなかった。
そのための婚約者候補なのだ。あくまで候補。決定ではない。だからこそ筆頭婚約者候補だったオリュガをその地位から下ろすことができたのだ。
王族とは狡い生き物だ。
それでいいと思っていたのに、あの日私の中に迷いが生まれた。

王城へオリュガ・ノビゼル公爵子息を呼び出したのは、筆頭婚約者候補から外すと伝えるためだった。
私が筆頭婚約者候補をネイニィ・リゼン男爵子息へ変更すると伝えると、オリュガはあの緋色の大きな瞳を見開き、固まっていた。奇しくもあの日用意した紅茶と同じ色合いの瞳が色をなくし、輝きが失われたように感じて息を呑んだ。
部屋に入室した時、私の隣にネイニィが座っていたことに腹を立てた時でさえもキラキラと感情のままに輝いていたのに、見開いた瞳は人形のように無機質に変わっていた。確かに緋色なのは変わりないのに、何の色も感情も失った瞳をしたオリュガに、私は思わず声をかけていた。
「聞いているのかい？」
まるで息をしていないかのようで、大丈夫だろうかとわずかに心配になった。
私が？　オリュガを？
オリュガは美しい。オメガらしく大きな瞳にけぶるようなまつ毛、ぷっくりとした桃色の唇と白く滑らかな頬。細い顎も男性にしては華奢な肩も、庇護欲を誘う姿をしたオメガそのものだった。
ただ、性格は凶暴だ。癇癪持ちで、わがままな性格は有名だった。そんなオリュガを鬱陶しいとは思っても、心配したことなど一度もなかったはずなのに……
オリュガの視線が私に向けられるが、その顔にも表情にも何の感情も乗っていない。貴族は表情を隠すとはいうが、そういうことではない。作られた人形でさえ、もっと表情があるのではないだろうか。
「……」
「オリュガ？」
オリュガは無言で私を見つめていたが、名前を呼ぶと、テーブルに置かれた紅茶に視線を落とした。伏せられたまつ毛は長く、緋色の瞳を隠して影を作る姿から目が離せなかった。
そしてまた瞼を上げ、私を見つめた時には、その瞳に熱が灯っていた。
今まで私を見ていた時の好意を乗せた輝きとは違う、何かを宿した瞳にハッとした気がした。
「……聞いております。ナリシュ王太子殿下」
静かにゆっくりと、その唇から声が漏れた。
媚びるような高い声でも、何が楽しいのかわからない弾んだ声でもなく、ただただ静かな声。
ネイニィ・リゼンを婚約者の最有力候補にすると伝えたにもかかわらず、オリュガはとても静かに微笑んでいた。
本当にこれはオリュガだろうかと動揺しながら、そのつもりでいてほしいと念を押した私に、オリュガはゆっくりと微笑んでわかったと頷いた。
どういうことだろうか。
今までのオリュガならば、ネイニィに罵詈雑言を浴びせて紅茶をひっくり返すくらいやると思ってネイニィを隣に座らせていたのだが。
あの日、静かに微笑みを浮かべるだけのオリュガを見た時、確かに私の中にジワリと感情が湧き

上がった。
なぜ今になってそれなのだ、と。
もう少しオリュガの変わりようを観察したくてお茶に誘えば、ニンレネイにお菓子をお土産に持たせてくれと言ってあっさりと去ってしまった。
立ち去ったオリュガに唖然としたのは私だけではないだろう。
時間をおいてから言うべきだっただろうかと、私はわずかに後悔した。
オリュガ・ノビゼル公爵子息が今まで筆頭婚約者候補だったのは、公爵家の子息であり、歴代随一の魔力量を持っていたからだ。最近になって素行の悪さが目立ちすぎたため、学院内の数名の婚約者候補のオメガの中から、頭脳明晰、魔法の腕も優秀なネイニィ・リゼン男爵子息が第一候補に挙がった。
オメガである彼らは番となるアルファを早く見つけたいはずだ。
三ヶ月に一度来る発情期の相手は番のアルファが相手をしてあげた方がいいし、いつまでも薬に頼れば、副作用の心配もあるだろう。それにアルファは何人でも番えるが、オメガは一生に一人しか番えない。
オリュガ・ノビゼルが自分に執着していることは理解していたが、それとこれは別だ。彼も貴族の子供。いつまでもわがままは通じないし、私と番わないのであれば、他に番となるアルファを見つける必要がある。
選択肢を広げるのは本人たちのためでもあると私は考えたから、すぐに筆頭婚約者候補が変更されることを双方に告げた。
一応兄であるニンレネイには断りを入れたが、殿下が直接伝えてくれるのであれば、弟も真剣に今後のことを考えるかもしれないと、ぜひお願いしますと言われた。
だから伝えたわけだが……
まさか、それを後悔するなんて……
「お茶はお二人だけの予定ではありませんでしたか？」
ネイニィとのお茶会にオリュガを誘った私に、ニンレネイが不思議そうに尋ねてきた。
そのつもりだった。
「では弟の代わりにニンレネイに付き合ってもらおうか」
ニンレネイは私の意図を察したのだろう。何か言いたそうにしていたが、結局あの後三人で形式的なお茶をした。
隣に座るネイニィが震える手で私の袖を掴み、オリュガ・ノビゼル公爵子息は自分に何かやるつもりなのだと訴えていたが、私は肯定も否定もせず、笑って受け流した。
もしかしたらそうなのかもしれない。今まで散々意地悪をされ続けていたネイニィが怯えている理由も理解はできたのだが、あの時のオリュガの様子が引っかかり続けていた。
「愚弟が申し訳ないね」
ニンレネイはいつものように申し訳なさそうにネイニィに謝ってはいたが、おそらく彼も自分の弟の様子に違和感を覚えていたはずだ。私が何か言うのを待っていたようだが、私にも具体的なこ

とが言える状況ではなかった。
お茶を飲んだ後、ニンレネイは慌てて帰っていった。兄であるノビゼル公爵へ急いで報告するつもりなのだろうと思い、私は引き留めなかった。ついでに名残惜しそうなネイニィも一緒に帰した。
私がニンレネイに一緒にお茶をするように誘ったのは、ネイニィと二人きりにならないためだった。本来ならあの後新たに筆頭婚約者候補となったネイニィと親交を深める意味で二人きりで過ごす予定になっていた。しかし、私は独断でニンレネイを参加させた。それは陛下の命令を無視して筆頭婚約者候補を保留にしたようなものだった。
あれからノビゼル公爵家からなんの動きも感じられないことから、おそらく静観するつもりでいるのだろう。
対外的にはネイニィ・リゼン男爵子息が筆頭婚約者候補ではあるが、私の中ではオリュガとネイニィのどちらを正式な婚約者にすべきか決めかねていた。
学院は相手を探す場だ。相性を見極め、卒業してから各家に婚約の打診をして結婚に至る。
王族だからといって早く婚約者を決める必要はない。
数名のオメガを婚約者候補にしているのは、王家のお手付きであることを示しているだけだ。他のアルファに取られないようにする処置である。特に筆頭婚約者候補は私の番になる可能性の高い者として周知させるための方便だ。
あの日から、私の中に生まれた迷いはそのままだった。

保健室から出て廊下を歩きながら、そういえばオリュガに撫でられてから、そのまま出てきてしまったことに気付いた。
ニンレネイは申し訳なさそうに頭を下げていたので、私の顔を見ていない。髪に手をやると、常であれば緩やかにウェーブを描く髪が乱れていた。
オリュガに撫でられた場所を自分でなぞるように触れる。
王族の頭を気安く撫でる人間はいない。
撫でられたのなんていつぶりだろうか。しかもその相手はオリュガ・ノビゼルだ。
わがままで、利己的で、他者を見下していたあのオリュガだ。ネイニィが今日も意地悪をされたのだと泣きついてくるのが日常だったのに、今は借りてきた猫のように大人しい。その変貌ぶりに、どういうつもりなのかと興味を抱き、オリュガを見かけたら話しかけるようになってしまった。
しかも前までは鬱陶しいくらいに私に纏わりつき、他の誰も近づくなとばかりに攻撃的だったのが嘘のように、今は近寄ってこようとすらしない。
むしろ私を見かけたら逃げているふしがある。
だからつい追いかけてしまうわけだが、逃げ回るのが悪手だとオリュガは気付いていないのだろう。
アルファとは狩猟本能が強い生き物だ。逃げられれば追いかけるのが習性だ。
きっと今の自分は瞳を鈍く光らせる肉食獣に近いのかもしれない。
ふう、と息を吐いた。

思考することで湧き上がった興奮を抑えようと唇を舐めたが、鼻に残った紅茶の匂いに軽く笑いが漏れる。
オリュガの紅茶の匂いが、いつまでも消えない……

◆◆◆

合同練習から一週間、僕は学院を強制休みにさせられた。ビィゼト兄上の命令は絶対なので、僕は大人しく休みを謳歌した。なんてことはない、ゴロゴロと寝ていただけだ。
それでも勉強はちゃんとやったよ？　ニンレネイ兄上は僕を立派？　なオメガにすることを目標にしているのか、いつにも増して学習道具を揃えるのに余念がなかった。
手作りテキストに、お手製テスト。ニンレネイ兄上には感謝しかない。
お礼を言ったら、なぜかニンレネイ兄上は渋い顔になったけど。
「いや、よくわからないが、ちゃんと教育をしておくようにと言われたんだ……」
「？　ビィゼト兄上に？」
今さら？　前世の記憶を思い出す前の僕は一切勉強をしていなかったのに？
学院だって行きたくなくて半分しか行っていなかったのに、僕に甘いビィゼト兄上は何も言わなかったのだ。
「いや、そうじゃなく……」

立ち読みサンプル
はここまで

誰に言われたのかわからないけど、アルファであるニンレネイ兄上の顔色が悪いところを見ると、ニンレネイ兄上より強い人が命令でもしたのかな？　ニンレネイ兄上も弱くはないけど、武闘派というわけではない。ノビゼル公爵家はどっちかというと文官を輩出する家柄だしね。
弟のお守りくらいちゃんとしろよ、とか言われたのかもしれない。
「心配かけてごめんね。次の定期テストは絶対順位上げて見せるからね！」
僕の意気込みに、ニンレネイ兄上は嬉しそうに頷いてくれた。

久しぶりに学院に出てきたら、なんと今日は剣術の授業があった。前回の合同練習で自分の目指す方向性をつかみ、将来騎士を希望したり、騎士ではなくとも剣術を習得しておこうと考え出したりした一年生が一緒に集まっていた。
騎士家の子息や、少なからず女子もいる。アルファ性の女子は体力があるので、剣術の授業を選ぶことが多いらしい。ベータでも家が騎士の家なら一応で選んだりもするので、割とたくさんの生徒が集まっていた。
これなら対戦相手がいっぱいいそうだと、僕はホクホクとしながら列に並ぶ。この前の合同練習でオメガはやっぱり弱いのだと再認識したから、アルファやベータがいっぱいいて、対戦相手に困らなそうで嬉しい。
オメガで剣術を選ぶ人間は少ないので、細身の僕は目立っていた。チラチラと見てくる視線は多い。まぁでも、前から悪名で注目は集めていたわけだし、今さら気にもならない。